

知的障害児の 4 コマ漫画説明場面における発話の非流暢性の特徴

述語の違いと文の構成要素に視点を当てて

村尾愛美

（東京学芸大学）

KEY WORDS: 知的障害, 発話の非流暢性, 文構造

（目的）

従来から、知的障害児に、吃音を含め発話の非流暢性が見られることが報告されている（島守・伊藤, 2011）。発話の非流暢性と文構造が密接に関わることが指摘されているが（Wijnen, 1990）、日本語を対象として、文構造を踏まえて知的障害児の発話の非流暢性を検討したものは筆者の知る限りない。そこで本研究では、述語の違いや文の構成要素に視点を当てて、多語期の知的障害児の発話の非流暢性の特徴を明らかにすることを目的とした。

（方法）

1. 対象児

対象児は、知的障害を主たる対象とする特別支援学校中学部・高等部に在籍する、多語発話段階の知的障害児 12 名（CA12:5～17:11, 平均 14:7, MA4:7～8:10, 平均 6:5, IQ29～66, 平均 45）であった。

2. 手続き及び分析方法

対象児に、4 種類の 4 コマ漫画を提示し、その内容を説明するように求めた。対象児の反応は IC レコーダーで録音し、発話を文字化した。述語をもたない文等は分析から除き、動詞を述語にもつ文と形容詞及び名詞+判定詞を述語にもつ文に分けた。なお、複数の述語からなる複文については述語を中心とした各まとまり（節）を文とみなした。非流暢性の頻度は、特異的言語発達障害児（以下 SLI 児）の非流暢性を検討した村尾・伊藤（2020）と同様の方法で算出した（非流暢性が生じた文の割合＝非流暢性が生じた文の数／分析対象となった文の総数×100）。

3. 倫理的配慮

本研究では、対象とした学校の学校長宛てに研究計画書を送付し、学校長及び担当教員、保護者から同意を得た上でデータを収集した。

（結果）

1. 非流暢性が生じた文の割合

図 1 は対象児ごとの非流暢性が生じた文の割合を述語の種類別に示したものである。12 名中 8 名（D, E, G, H, I, J, K, L 児）は動詞を述語にもつ文のほうが形容詞及び名詞+判定詞を述語にもつ文に比して高い傾向を示したが、12 名中 2 名（C, F 児）はその逆の傾向を示した。

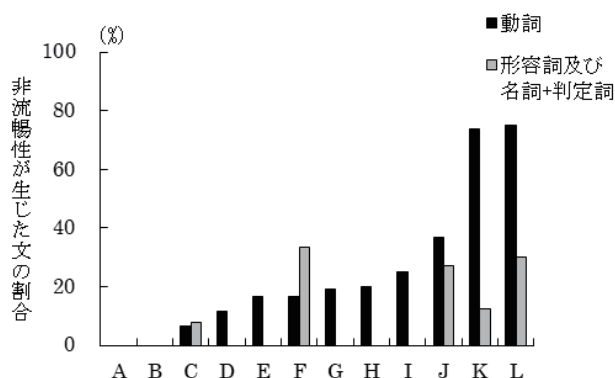


図 1 対象児ごとの非流暢性が生じた文の割合

2. 非流暢性のタイプと言い直しの分析

対象児 12 名に最も共通して観察されたのは言い直しと挿入であった（12 名中 8 名）。そこで、動詞を述語にもつ文のみを対象として、1) 動詞, 2) 動詞が要求する不可欠の要素である項, 3) 文に付加的・余剰的に情報を足しているに過ぎない要素である付加詞に視点を当て、どの要素を言い直しているかを分析した。

表 1 は言い直した要素とその特徴を示したものである。動詞の変更には、動詞そのものを変更したものや形態的な変更をしたものが含まれる（例「組み／遊んで／ます」）。項、付加詞の変更には、項や付加詞そのものを変更したもの（例「ボールを／サッカーを教わろうとした」）、項、付加詞と密接な関わりをもつ助詞を変更したものが含まれる（例「女の子は／と、にこにこして」）。付加や削除は文産出後、項や付加詞を付加または削除したものを指す（例「貸さない／妹に貸さないから」）。

言い直しがみられた 8 名の言い直し 24 個の内訳をみると、項に関する言い直しが多く、特に、項の変更が多い傾向にあった。

表 1 言い直した要素とその特徴

	変更	付加	削除	計
動詞	5	0	0	5
項	12	3	1	16
付加詞	1	2	0	3

（考察）

本研究の結果、対象児 12 名中 8 名において、動詞が述語の文のほうが形容詞及び名詞+判定詞が述語の文に比して非流暢性の割合が高い傾向が見られた。この結果から、述語の違いが知的障害児の発話の非流暢性に影響することが示唆された。

さらに、動詞が述語の文のみを対象として、言い直しを動詞と項、付加詞との関係でみると、項を変更するものが多い傾向にあった。この結果から、多語期の知的障害児の発話の非流暢性には、動詞と項との関係に関わる言語知識が十分ではないことが影響している可能性が考えられた。

上述の通り、本研究の対象児には、項の変更の言い直しが多く見られた。しかし、村尾ら（2020）の SLI 児の言い直しには、項や付加詞の付加が多く見られている。村尾ら（2020）は、この特徴から、SLI 児の文構成のスペースが小さい可能性を挙げている。文構成のスペースとは、話し手が文を構成する際に一時に保持することのできる構文的情報の量の限界のことである（神尾, 1979）。このことを踏まえると、構成要素の付加に比して変更を多く示した本研究の知的障害児は、SLI 児に比してより文構成のスペースが小さい可能性が考えられる。

なお、SLI 児と知的障害児の言い直しの特徴の違いに、メタ言語意識の違いが影響している可能性も考えられる。この可能性の妥当性については、対象児の MA や言語発達段階を一致させる等して、今後さらに検討する必要がある。

(MURAO Aimi)